

平成 21 年 4 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2006～2009
課題番号：18202029
研究課題名（和文） 人種の表象と表現をめぐる融合研究

研究課題名（英文） An Interdisciplinary Study of Representation and Expression of Race
研究代表者
竹沢泰子（TAKEZAWA YASUKO ）
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：70227015

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学
キーワード：人種 表象 差別 民族 科学 ジェンダー マイノリティ 偏見

1. 研究計画の概要

本研究は、生物学的概念としての「人種」の有効性が否定されてから久しいにもかかわらず、21世紀に入っても人種がかくも強固に社会的に存在するのはなぜかという問題を究明するものとして出発した。

そのような人種の社会における実在性、すなわち社会的リアリティを理解する手がかりは、人種の表象と表現にあると本研究では考え、表象と表現に関する分野横断的、地域横断的なアプローチを試みた。

その際、近年の欧米の研究動向を参照し、表象の現実歪曲性よりも、表象の産出されるプロセスに関心を注いできた。また他方、マイノリティの側がステレオタイプ的な表象を解体すべく主体的に人種の表現を取るといった戦略にも注目し、新しい抵抗運動の可能性を探った。

2. 研究の進捗状況

本研究は、科研費交付以前の2年間と公布後の2年間の4年間の共同研究を重ね、2008年12月に第12回京都大学国際シンポジウム、2009年5月出版予定の『人種の社会的リアリティ』（岩波書店）の二つの、大きな研究成果を上げることが出来た。また現在は、英文の論文集刊行の企画も京都大学学術出版会の理事会承認を得て進んでいる。

（1）京都大学国際シンポジウム「変化する人種イメージ表象から考える」は、幅広い多角的・学際的な視点から、第一線の研究成果を社会に向けて発信することができた。また共同討議によって国内外の研究者の対

話・ネットワークの構築、拡大に大きく貢献した。新聞などでも大きく取り上げられ、一般社会への学術的成果への関心を喚起することもできた。なおシンポジウム報告書を本年3月に刊行した。

（2）学術書として岩波書店から成果を本年5月末に刊行予定。多数の研究分担者・協力が執筆し、研究代表者が、欧米の既成理論とは異なる人種表象をめぐる新しい理論的枠組みを提示した。成果を出版することにより、長期的な学術的貢献を図った。その内容は、①総論、②ジェンダー、階級、人種との交錯、③「見えない人種」の表象、④科学言説⑤21世紀の抵抗の5部門である。人種の表象と表現をめぐる動態を、支配と消費文化の生産・再生産の側面を注視しつつ、マスメディア、絵画、映画、広告、社会的言説、現代アート、またゲノムなどを含む科学言説を取り上げることで、学際的、多元的にすることを目指してきた。

（3）その他 日本語版とは内容も異なる英語版を出版準備中。またHPでも研究成果を発表し、構築を続けている。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

（理由）

岩波書店からの刊行が決まり、また京都大学国際シンポジウムに採択されるなど、本研究が高く評価されたため、当初の計画以上の成果をあげることができた。また英文学術書刊行、YouTubeによるシンポジウムの動画発信、HPによる研究成果公開、京都大学学部生向けのリレー講義などもすべて計画以上の進展である。

4. 今後の研究の推進方策

人種の表象と表現をめぐる研究に具体的な成果を上げたため、地域横断的な研究を一区切りとし、この間蓄えてきた問題意識と方法論に基づき、2009年度は、日本社会における人種・民族表象に注目する。日本社会を専門とする協力者を新たに多数加え、歴史的マイノリティから現代の移民に至るまで、国際的な視野を踏まえつつ、彼らの人種民族表象について検証していく予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①川島浩平『『ダーウィنز・アスリート』のその後 10年—アメリカにおけるスポーツと人種の間』『スポーツ社会学研究』第16号(2008年)、3-17頁。

②藤原辰史「待機する共同体—ナチス収穫感謝祭の参加者たち 一九三三—一九三七」『人文学報』96号(2008年4月)、1-31頁。

③北原恵「『御前会議』の表象—『マッカーサー元帥レポート』と戦争画」甲南大学文学部社会科学『甲南大学紀要・文学編：社会科学特集』(2008年3月)、23-52頁。

④藤原辰史「帝国収穫感謝祭の丘を訪ねて—ハーメルン紀行—ナチスが組織した熱狂と陶酔」『at』(2007年10月)、88-104頁。

⑤田辺明生“Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-postcolonial Transformation in Rural Orissa, India”『American Ethnologist』(2007年3月)、558-574頁。

⑥井野瀬久美恵「なぜ「動物」だったのか?—イギリスの愛護意識の背後」『ヒトと動物の関係学会誌』No. 19(2007年)、28-34頁。

[学会発表] (計2件)

①第12回 京都大学国際シンポジウム
「変化する人種イメージ—表象から考える」
竹沢泰子 他

(2008年12月5日、6日 於：京都大学)

②文化人類学会 第42回研究大会

竹沢泰子 他

「人種の表象」(2008年6月1日 於：京都大学)

[図書] (計2件)

①『人種の表象と社会的リアリティ』(竹沢泰子編 岩波書店 2009年5月刊行予定)

②『第12回京都大学国際シンポジウム報告書 変化する人種イメージ—表象から考える』

(竹沢泰子編 京都大学国際交流推進機構 2009年3月31日 総171頁)

[その他]

シンポジウム YouTube、テキスト等

<http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-purpose.html>

<http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-purpose.html>

研究会 HP

[http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-](http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-purpose.html)

[to-u.ac.jp/~race/frame-](http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-purpose.html)

[purpose.html](http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-purpose.html)